

あけのほし 2016年3月13日

「聖書は実践指導書」

菊田行佳

■ ヒルティを読む

埼玉で高校の教師をされている平田栄一さんが、聖書の内容やイエスの教えに具体的に出会ったのは、大学の4年生になってからでした。大学に在学していた1974～78年は、二度のオイル・ショックにすっぽり挟まれた時期で、卒業する頃にはそれまでと打って変わって就職はままならなくなっていました。いくつかの企業を訪問してはみましたが、ぜひともと思えるような働き口は見つかりません。友人も皆一様に苦戦していました。

暗い気持ちで過ごしていたとき、大学の学生生協の小さな書店でふと目にとまったのが、カール・ヒルティの『幸福論』（岩波文庫）でした。それまでも、アランやラッセル、トルストイなどの『幸福論』や『人生論』を、そのタイトルに惹かれて読んでいました。しかし今度は就職難という自分の現実を目の前にして、一生の仕事とは、本当の生きがいとは何だろうか、と本気で考えざるを得なくなっていたのです。そして、受験時代に自ら課した「大学4年間のうちに、確たる人生の方向を見いだす」という課題が、まったく解決していないことに改めて気づかされ呆然としました（前号参照）。

ヒルティは『幸福論』のなかで、幸福について実際の人間生活に即し具体的・実践的に語っており、平田さんは貪るように読み進めました。

「働きのよろこびは、自分でよく考え、実際に経験することからしか生まれない。それは教訓からも、また、残念ながら、毎日証明されるように、事例からも、決して生まれはしない。」

「ただの遊戯ではなく、真の仕事ならどんなものであっても必ず、まじめにそれに没頭すればまもなく興味がわいてくるという性質を持っている。」

「自由に至る道は、われわれの力の及ばない物をすべて軽視することにある。」

こうした言葉が、焦る平田さんの気持ちを楽にしてくれました。

ヒルティは、自己教育を達成することのできる「ただ二つの方法は、ストア主義とキリスト教である」と断言します。そして後者に関しては、福音書のイエスの教えを素直に受け入れ実行してみよ、そしてその真実をためし、それによって心によるこびが与えられることを経験できたなら、その教えを信じたらよい、と勧めます。平田さんは、このようにヒルティが自信を持って説く“実践的”キリスト教に接して、しだいに、聖書を本気で読んでみようと思うようになったのです。はっきり「聖書に出会った」と言えるのは、この時でした。

■ 聖書は実践指導書

「どんなに多くの書物を読み、知識をたくわえ、そこに行く道を知っていても、そこへ

向けて出発しようという一念を起こさない人は、本当の意味でそのものを知ることはできないでしょう。

聖書、特に新約聖書が行為を要求する実践指導書であり、私たちに永遠の命を解きあかしてくれる書であるなら、一念発起してその教えに従おうと決意し、行為を起こさないかぎり、本当の意味でイエスの教えをわかるということはできないと思います。」(井上洋治著『日本とイエスの顔』)

数年後、井上洋治神父に出会い、この言葉が神父自ら聖書を「一念発起してその教えに従おうと決意し、行為を起こ」してきた体験に裏付けられたものであることを知って、平田さんは大きな衝撃を受けました。「聖書は信仰の書である」とか、「聖書は心で読め」とかはよく聞きますが、「聖書は実践的指導書である」と身をもって断言できる人がどれだけいるだろうか……。ここにヒルテイが指摘したキリスト教の、聖書の実践性を生きぬいた神父の姿を目の当たりにして、平田さんは感動せずにはられませんでした。

その井上洋治神父自身も、19世紀末に登場したフランスのカルメル修道会の修道女、リジューのテレジアの生き方に魅せられた一人です。「どこまでもテレジアを追いかけることによって、テレジアの掴みえたものを自分のものにしてみようと決心し」(井上洋治著『余白の旅』) 洗礼を受けます。そして、「とにかく力の限り、いけるところまでこの白い道の上を歩いていこう」と、彼女と同じカルメル会に入会し、フランスで七年半の修道生活を送ります。この一途さに、井上神父の抜き差しならぬ求道心と実行力を見て取れると平田さんは言います。まさに生涯をかけて聖書を生きようとした姿です。

井上洋治神父は、他のところでこのようにも言います。知識には、「何々について知る」というものと、「何々を知る」という二つがある。例えば、新居浜の町をガイドブックやインターネットの検索で得た情報で知るのが前者で、実際に新居浜を訪れて、町を歩き、人と触れあうことで得られるものが後者です。永遠の命とか、より良いのちのあり方というような、手に取ってみるものの出来ないものは、言語化することができません。ですので、実際に、自分の足や手を使って、それをやってみなさいとしか言えないものだという事です。聖書の言葉というのは、まさしく、どうしたら命に至らせるために、その行動を起こさせるように出来るだろうかといった視点で、書かれたものなのだとと言えるでしょう。(平田栄一著「心の琴線に触れるイエス」聖母の騎士社を参照しています。)

「ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。『先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。』イエスが、『律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか』と言われると、彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさいとあります。』イエスは言われた。『正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。』」(ルカによる福音書 10 章 25-28 節)